２０２１年度
入学試験問題

国　語

２月１１日

受験番号	氏　　名

中村高等学校

問題は次のページからです。

一

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書きなさい。

(1) 若さが躍動している。
(2) 細かい粒子で構成されている。
(3) 国王の戴冠式。
(4) 強く心に迫るものがあった。
(5) 足に鈍い痛みを感じる。

二

次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書きなさい。

(1) トウヒ行を決行する。
(2) キテンのきく人だ。
(3) 群衆がサットウする。
(4) 池の水がニゴっている。
(5) 旗をフってむかえる。

三

次の1～5の和歌には、それぞれ一つずつ歴史的仮名遣いで書かれている単語がある。それぞれ抜き出し、現代仮名遣いに直して平仮名で書きなさい。

1. たごのうらに　うちいでてみれば　しろたへの
　ふじのたかねに　ゆきはふりつつ

2. はなのいろは　うつりにけりな　いたづらに
　わがみよにふる　ながめせしまに

3. ちぎりおきし　させもがつゆを　いのちにて
　あはれことしの　あきもいぬめり

4. よのなかよ　みちこそなけれ　おもひいる
　やまのおくにも　しかぞなくなる

5. ももしきや　ふるきのきばの　しのぶにも
　なほあまりある　むかしなりけり

四 次の二つの文章は長田弘『なつかしい時間』の一節です。よく読んで、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

＊字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

文章Ⅰ

会話という言葉があり、会話にとても似た言葉に、対話という言葉があります。

よく似ていて、おなじように見える言葉ですが、たとえば英会話と言っても英対話とは言わない。また逆に、たとえば日米対話というような言い方をするような場合、対話を会話と言い代えることはできない。［　Ⅰ　］と言っていいのが、会話と対話です。

コミュニケーションの手段が電話を核として多様になったいま、さまざまなレヴェルで、会話のかたちはずっと豊富になりました。けれども、対話はどうか。会話のかたちが思いがけないほど豊富になったそのぶん、わたしたちのあいだの対話のありようというのは、むしろ貧しくなったのではないかと気づかわれます。

そういうときに思いだしたい一冊の本があります。二十世紀という時代が始まる明治三十年ごろ、老いてなお意気さかんな勝海舟が、語り尽くした『氷川清話』です（講談社学術文庫ほか）。

『氷川清話』は、勝海舟が話した言葉を聞き書きした本ですが、勝海舟の語る言葉は当時たいへんな人気で、勝海舟のもとに訪ねた記者の手で、いろいろな新聞が争ってその聞き書きを載せた。話しぶりは自由闊達ですが、それは会話の記録ではありません。勝海舟の一人語りの本ですが、それは対話の記録です。語っているのは勝海舟一人ですが、勝海舟はあたかも百年後の今日にむかって、どこまでもこちら側にまっすぐ話しかけるようにして、とても直截な語り方で話している。

読みかえすたびに惹きつけられる本ですが、そのなかで、勝海舟はしばしば談判について語り、明治維新から日本の新しい国のかたちができてゆくまでのあいだに非常に重要だった方策として、談判というものを挙げています。

談判というのは、いろいろなことを始末したり、おおよその事を取り決めたりするときに、論じ合い、談じ合って交渉すること。つまり、対話することです。いまでは「談判」という言葉そのものもだんだんもちいられなくなり、

人と人とが交わす言葉のあり方にのこっているのは会話ばかりで、対話、談判という話し方はいつか遠ざけられるままになってしまったように思えます。

そうであって、のぞましくない事件などが生ずるたびにきまって指摘されるのが、対話の不在、あるいは対話の不足です。しかしそれは、日常ふだんに対話という考え方がうすく、たがいに向き合って問題を差しだしあって話すという習慣を欠いているという状況が、事あるたびに露出してしまうためではないでしょうか。

会話といっても、多くは［　1　］お喋(しゃべ)りを、いまは会話と言っていることが多いように思います。たがいに向き合って、［　2　］代わりに、考え方が違えば同席せず、［　3　］格好になりがちなのは、結局、対話という考え方、あるいは勝海舟の言う談判の考え方こそ、この百年、時の過ぎゆくままに、この国が失いつづけてきた大事なものではなかったか、と案じるのです。

たとえば、勝海舟はふりかえって、談判というのはたがいに「少しの傲慢(ごうまん)の風なく、同席する」こと、そうしてたがいに「赤心(せきしん)を披(ひら)く」ことだったとしています。すなわち、「野暮(やぼ)」を言わないで、相手に対する「敬礼を失わない」ことが、談判の作法だった。会話が会話を楽しむことだとすれば、①対話、談判というのは、問題の引き受け方というか、心の決め方というふうに言っていいかもしれません。

文章Ⅱ

わたしたちにとっての情報のあり方やコミュニケーションのあり方をめぐって、このところずっと強調されてきたことは、まず「発信する」ということの大事さです。

発信するというのは、自分から外部へ、情報を送りだすこと、言葉を発してゆくこと、意味を表してゆくことです。わたしたちの今日を特徴づけるのは、なにより情報産業の発達ですが、情報産業というのは、そのまま発信産業といっていいほど、発信するちからを引きだすことにちからを注ぐことで発達してきました。

けれども、発信することの大事さが強調されればされるほど、逆に、いつかすっかり衰えてきているように思えるのが、「受信する」ちからです。

他者の発しているシグナル。他者の求めているコミュニ

ケーション。他者の言葉。他者の沈黙。そうした他者の存在というものを、自分から受けとめることのできる確かな受信力が、ずいぶん落ちてしまっているのではないか。そしてそうした②受信力の欠如が、今では、社会のあり方を歪ませるまでになっていないか、どうなのか。

受信するちからを、自分のうちに、生き生きとたもつことができるように、もっと苦心しなければならない、と思うのです。そうでないと、大切なものを自分に受けとめて、自ら愉しむということが、いつかできないままになってしまう。

受信力が自ら愉しむちからを、人それぞれのうちに育てるのだということ。そのことを考えるとき、思い合わせるのは一冊の本です。亡くなられた中国文学者の入矢義高さんが心を砕かれた『良寛詩集』です(漢詩集訳注、東洋文庫、平凡社)。

〈　中略　〉

「発信する」ばかりの人は「自ら称して有識と為す」人だ、と良寛は言います。ですから「諸人みな是となす」。けれども「却って本来の事を問えば、一箇も使う能わず」。大事なのはどんな言葉か。［　X　］言葉ではない言葉、［　Y　］言葉のあり方です。

しかし、ふりかえって周囲を見わたすと、一方的に発信する言葉だけが容易に手に入るいまの世に、確実に失われてきてしまったのは、他者の言葉をきちんと受信し、きちんと受けとめられるだけの器量をもった言葉です。

（長田弘『なつかしい時間』岩波書店）

問一　［　Ⅰ　］に入るのに適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、まったく異なっているとは言えず、似たような意味を表している
イ、まったく異なるとは言えないが、だいたいの意味において異なっている
ウ、一見おなじようには見えないが、むしろおなじ意味を表している
エ、一見おなじように見えて、意味の方向はむしろ逆を向いている

問二　［　1　］～［　3　］に入る言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、目が合えば衝突、喧嘩（けんか）という
イ、電話でのみ心情を語る
ウ、言葉を使い捨てにする
エ、違ったものの見方をかさねてみる

問三　――線①の説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、会話の場合、たがいの心のありようはまず問われないものだが、対話や談判のような話し合いの場では、心のありようが一番の問題になるということ。
イ、会話と違って対話や談判は、たがいに相手に対する礼を失うことなく問題を差しだしあい、話し合いを重ねる心のありようが大切であるということ。
ウ、会話と違って対話や談判は、気楽な気持ちでその場に臨むことがゆるされるものではなく、常に真剣勝負が求められるということ。
エ、会話の場合、そのかたちにはたくさんの種類があり、参加する側もそれぞれが望む形を選ぶことができるが、対話や談判は気軽にできるものではないということ。

問四　――――線②について、次の各問いに答えなさい。

(1)　筆者はどう言いたいのだと考えられますか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、受信力の欠如くらいで社会のあり方は歪(ゆが)まない。
イ、受信力の欠如が社会のあり方を歪ませている。
ウ、受信力の欠如が社会を歪ませているかは疑問だ。
エ、受信力の欠如と社会のあり方とは関わりがない。

(2)　「受信力」にはどのような働きがあると筆者は考えていますか。それがわかる一文を抜き出しなさい。

問五　［　X　］・［　Y　］に入る言葉の組み合わせとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、X　言いよどむ　　Y　言いつのる
イ、X　情報を受ける　Y　情報を送る
ウ、X　言いつのる　　Y　受けとめる
エ、X　言いよどむ　　Y　受けとめる

問六　国語の授業でⅠ・Ⅱの二つの文章を読んだ後、「これからのコミュニケーションのあり方」というテーマで作文を書くことになりました。具体的な体験や見聞などを含めながら二百字以内で書きなさい。
なお、書き出しや改行の際の空欄、句読点やカギカッコなどもそれぞれ字数に数えなさい。

五

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

＊字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

北九州工業高校一年生の三郷心（みさとしん）は電子機械科唯一の女子生徒である。旋盤（加工すべきものを回転させ、刃物を当てて所要の形に切り削る工作機械）を使った「高校生ものづくりコンテスト」を目指すことになった心は、悩みを祖母に打ち明ける。

「どうしたんね、心ちゃん。なんかしょぼくれとるね」

祖母はくるりと心を振り返った。暗い顔をしていたのがわかったのだろう。

「うまくいかんことが多い」

心はぽつんと言った。

「ほかの部員はみんなすごいと。どんどん上達しとる。それに比べて、私は毎日同じことを指摘される。進歩がないん」

それは春休みの強化訓練の時から感じていたことだ。男子たちの、ここいちばんのパワーはすごかった。朝、工場に入ってくる時から、目に見えるような力のベールをまとってくる。そして、そのパワーを旋盤の上で集中力に変え、細かくて正確な仕事をするのだ。特に吉田など、春休みのたった二週間の練習で見ちがえるほど腕を上げた。

それに比べて、自分の力はうまく旋盤に乗っていない。知らない間に体からもれているのではという気がするほどだ。

祖母は少し笑ったようだった。

「心ちゃん、男子の中でちょっと気おくれしとるんやないんかね」

「それはないと、思う」

自分の心を探ってから、心は慎重に答えた。

工業高校に通う心にとって、男女の区別というのは不思議なポジションにあった。自分以外は、みんな男。気にしてしまうと、A とめどがなくなるし、気にしたところでどうすることもできないことのほうが多い。そもそも男ばかりなのは大前提の覚悟で入学を決めたのだし、［　I　］のびのびできる部分もある。実際、全裸の男子を目撃しようが、隣でパンツ一丁になられようが、そんなことは気にならない。

「あたしはやっぱり気になったけどね。ほら、ばあちゃん、昔は職人に交じって旋盤回しよったでしょ。男の職人には

どうしても勝てんところがあってねえ。心ちゃんも男の中でコンテストを目指すのはつらいところもあるやろう」

祖母は言う。

Ⅱ　工業高校で男子と同じように実習をやっていくのは、ハンディがある。体力がいるし、危険物を扱ううえで度胸もいる。力も度胸もあるほうの心でも、男子ほどには備わってないと感じることが多い。でも。

「つらいっていうよりも……」

言わないでおこうと思っていたが、やっぱり口に出てしまったのは、仏壇の前だからだろうか。

「特別扱いされることのほうが、嫌なんよ」

男子との明確なちがいを気にする一方で、機械科に通う女子はたったひとりだという現実がある。希少価値の分だけ、自分へのあたりは柔らかいと感じることもある。①持っていないというハンディと、もらうというハンディがあるけれど、もしかしたら、もらうハンディのほうが大きいんじゃないか。

本意とするところではなかったが、それに気づいた時には、もう心は抜き差しならないところにきていた。旋盤に夢中になっていたのだ。硬い鋼の形を自在に変える工作機械の魅力に取りつかれていた。あのあらがえないような鉄のパワーを受け止め、形に返す旋盤の魅力に。

ありがたいことに、そんな心のがんばりが自然と周りに浸透していったのか、部活の中では特別な扱いを受けると感じることもない。

けれど、外部の人にはⅢ　まだ女子は特別だという思いがあるようだ。

「コンテストには校内選考で勝たんと出られんのやけど、ほかの学科の先生から女子が出たほうが学校のＰＲになるから、私が選ばれるやろうって、言われた」

あたりまえだと言わんばかりの軽々しい口調だったので、②余計にこたえた。自分のがんばりをせせら笑われたような気分だった。

思い出して、心はまた暗い顔になる。

「それは男のゼラシーやね」

「ジェラシー？」

「その男は女に負けるのが悔しいけん、そんな理由をつけるんやろ。気にせんでいい」

ちょっと意地悪な顔になって言う。③ふっと力が抜けて、笑ってしまった。祖母も少し笑ったけれど、すぐに真顔に

なった。

「心ちゃん、ものをつくるのに男も女もないよ。昔じいちゃんが言ってくれたんよ。あたしがへたくそで悩んどった時ね。『女には旋盤できんのやろか』ってきいたら、『ものをつくるのに男も女もあるか』っち怒られたよ」

「そうよね」

いくぶん軽くなった気がする首を動かして、④心は仏壇に目を移す。遺影の祖父は記憶よりも少し若い。福岡県の卓越技術者に選ばれた時に撮影された六十代半ばのものだ。どこか照れくさそうではあるものの、確固たる自信が感じられるよい笑顔だと心はいつも思う。

（みはら三桃『鉄のしぶきがはねる』講談社）

問一　――線A・Bの語句の意味を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A「とめどがなくなる」
ア、悪い影響が出る
イ、他人に知られる
ウ、終わりが見える
エ、際限がなくなる

B「抜き差しならない」
ア、あきらめられない
イ、どうにもならない
ウ、悲しくてならない
エ、悔しくてならない

問二　Ⅰ〜Ⅲに入る言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、確かに　　イ、必ず
ウ、むしろ　　エ、やはり

問三　――線①とありますが、1.「持っていないというハンディ」と2.「もらうというハンディ」はここではそれぞれどのようなものを指していますか。二つを簡潔に説明しなさい。

問四　――線②とありますが、それはなぜですか。理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、女子が特別扱いされるのは当然だということを平然と言われたから。
イ、自分の実力がまだまだであることを自分が一番よく分かっていたから。
ウ、校内にある男女差別は知っていたが、先生がはっきりとそれを口にしたから。
エ、一年生の自分はコンテストではまだ勝てないと先生に言われたから。

問五　――線③とありますが、そうなった理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、女性を下に見て発言する男性の様子を面白おかしくまねる祖母をほほえましく思い、つい、笑いをこらえることができなくなってしまったから。
イ、カタカナ語をうまく発音できず、心の前でわざと意地悪な表情を作る祖母の様子がこっけいで、悩んでいたのがばかばかしく思えてきたから。
ウ、明るくほがらかな祖母の様子を見ているうちに、つまらないことをあれこれ考えている自分を笑いたい気持ちになったから。
エ、祖母が自分を気づかってくれる気持ちがうれしく、気にしなくていいとおおらかに言う祖母の口調に不意をつかれ、暗い気持ちが一瞬ゆるんだから。

問六　――線④とありますが、ここでの心の心情として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、素晴らしい職人であった祖父のことを思い出し、自分も祖父のような生き方をしたいと強く決意している。

イ、特別扱いされずに自分の実力だけを見てくれる世界で生きてきた祖父のことをうらやましく思っている。

ウ、祖父が祖母に言ったという言葉に自分も励まされるような気がして、今は亡き祖父に思いをはせている。

エ、今のままでの自分では亡き祖父にしかられてしまうと考え、気持ちを明るく保っていこうと思っている。

問七　次のうち、本文の内容として適当なものにはA、適当でないものにはBを解答欄に記入しなさい。

ア、心は男子生徒ばかりの学校で唯一の女子生徒ということで男子には絶対に負けられないという気負いがあった。

イ、体力的にはどうしても男子にかなわないと思い、心はコンテストへの出場を半ばあきらめている。

ウ、男子とのちがいを気にする一方、心は旋盤工作のとりことなり、校内選考で勝ちたいと思っている。

エ、心と同じように、心の祖母もかつては旋盤を学び、男性との実力のちがいを気にしていた。

オ、外部の人たちよりも、心の身近にいる人の方が心の志や思いに対する理解がない。

以下余白です。